

「長崎のキリシタン・潜伏と承継の祈り」

平成28年1月 池田 勉

大航海時代1549年ポルトガルのフランシスコ・ザビエルによって鹿児島に上陸されたキリスト教は翌1550年には長崎県平戸に上陸された。ときは戦国の世、フランシスコ・ザビエル等は勢力増強を図る戦国大名と交易を結び、その代償にキリスト教布教認可を得て、仏教から改教させる大名命などでキリシタンは急速に増加繁栄されていった。が、1587年に時の権力者・豊臣秀吉による伴天連追放令に端を発し、次第に禁教へ、弾圧へ、移住へ、そうして潜伏へと信徒は苦難の道へと余儀無くされるに至っていった。その後、禁教の弾圧は厳しさを増し再び仏教へと迫害の掛る中で、多くのキリシタンは潜伏し神仏を隠れ蓑にして、納戸や山中、岩陰での祈り（オラショ）を行なう潜伏キリシタンとなって、独自の信仰形態を構築してキリスト教信仰を二百数十年に亘り守り続け承伝されてきた。

世は近代化へと流れ、1865年には長崎の大浦に居留するフランス人用の大浦天主堂で浦上の潜伏キリシタンが神父に名乗り出て信徒であることが判明された。世に言う信徒発見である。これを契機に1873年（明治6年）にはキリスト教禁教令の高札廃止で、自由な信仰が得られている。それに伴い潜伏していたキリシタンは祈りの場として各地域に教会堂が献堂され復活に至っている。

今回の写真展では、キリスト教の伝来から復活に至る一連の歴史的出来事や現在の教会堂と祈りの有様および聖地に関する一連の写真作品凡そ250点の展示を予定している。内容的には

(1)「西坂への道」として二十六聖人が東彼杵の浜から長崎の西坂までの道程と処刑の絵と銅像など、(2)「島原・天草の乱」として原城跡の遺跡景など、(3)「禁教・弾圧」として踏み絵や各地の殉教地など、(4)「潜伏」として信仰の具と各地の祈りの場所など、(5)「かくれキリシタン」として生月と外海のオラショなど、(6)「復活」として大浦天主堂、五輪教会、浦上天主堂とミサ、そして現在の(7)「こころの巡礼」として、平戸、佐世保、外海、長崎、五島列島、天草地方の教会堂とミサなど(8)「クリスマス」として教会堂のイルミネーションとミサ等などを該当地のロケーションをも加えて長崎のキリシタンを表現した写真となっている。

尚、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が平成28年7月にユネスコの世界遺産に登録が予想されており、それらの応援も含めて本写真展は企画された。また7月には本件に関する写真集も発刊予定です。



写真展の展示予定（写真集掲載）の「いのり」の場面